



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ゲーテのイタリア旅行とヴィンケルマン
Author(s)	岩田, 聡
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 37-52
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25949
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P37-52.pdf



ゲーテのイタリア旅行とヴィンケルマン

岩 田 聡

I

18世紀の後半、アルプスを越えてローマやナポリに旅行する旅人たちにとって、イタリアの旅館のサービスと設備、治安と衛生の問題は大きな関心事であった。イギリス人旅行者であれば、愛用のティーポットのほかに、軽いキルティングの掛け布団と枕とシーツは必需品であった。さらに衛生上の配慮から銀の食器(銀には消毒作用があると考えられていた)、鍵のない寝室で盗賊から身を守るための門、護身用のピストルやサーベルなどを持参していた者もいた。こうした悪条件にもかかわらず、北方のヨーロッパ人をアルプスの南へとひきよせたのは、ギリシア・ローマの古典古代の魅惑であった。

18世紀半ば、南イタリアのポンペイやヘルクラネウムの遺跡が発掘されると、遙かな時をへて甦った古典古代の美術は、ヨーロッパ中に熱狂的な古代崇拜をもたらし、古典古代に学ぶことは必須の教養となった。イタリアは教養人にとっての「エルサレム」となり、芸術家、学者、貴族、詩人たちは競って南国の空の下へ聖地巡礼をした。ギリシアはまだオスマントルコの支配下にあった。パイロン卿などのギリシア崇拜者の義勇兵が馳せ参じて、ギリシア独立戦争が戦われるまでには、まだアメリカの独立戦争や、フランス革命などに刺激されたギリシア人の民族としての覚醒を待たなくてはならない。

1786年10月末、37歳の誕生日をボヘミアの湯治の町カールスバートで祝って間もなく旅に出たゲーテは、北イタリアを抜けて憧れの都ローマを目指していた。ワイマル公国の大臣であったゲーテは、カール・アウグスト公に無期限の休暇願いを出して、夜陰にまぎれて逃走してきたのである。もちろん、用意周到なイギリス人旅行者たちのような旅装を整えるゆとりはなかった。「旅囊と穴熊皮の鞆」とを用意しただけであった。一年半に及ぶことになった大旅行の装備としては、じつに簡素なものである。ローマの北の玄関口、ポルタ・デル・ポーポロに向かう聖地への巡礼者ゲーテの姿を、伝記作者フリーデントールは次のように描いている。

彼は一人の召使を雇ってボローニアを通過、フィレンツェにはわずか三時間いただけで、

ついに北からローマへ入る。ローマへ入るまえ数日間は到着かず、夜も服を脱がず、まだ明けきらない早朝に馬車の準備をさせる。

イタリアの他の地方では見られないほど荒涼とし、荒廃したローマ郊外の土地カンパーニアも彼の目に入らない。当時のすべての旅行者たちの主たる話題である盗賊たちについて、彼は何も知らない。処刑された盗賊たちが半ば腕や脚を腐らせているのをどこでも見られるはずなのである。彼らは法王庁によって道端にさらしものにされている。しかしそれによって盗賊たちの強力な団結がいつこうに脅かされる気配はないのである。彼の目に入るのは、はるか十一月の太陽に明るく輝く聖ピエトロ寺院の丸天井だけである。その光景はまさに古き時代の到来というべきで、そのときローマはまわりの暗さを背景に、徐々に、その勝ち誇った姿を浮き上がらせていたのである。¹⁾

『イタリア紀行』²⁾のなかでゲーテ自身も書いているように、ローマへと急いだ主な原因の一つは、この「永遠の都」を一刻も早く見たい、という欲求の抑えがたい昂まりであった。そして、11月1日の万聖節に間に合うためには、ヴェネチアを立って以来かなり遅れてしまった旅程を回復する必要があった。フリーデントールの描くゲーテはローマを目前にして、まるで物に憑かれたように先を急いでいる。たしかにゲーテは、聖ピエトロ寺院の円蓋を目指して急いでいた。けれども、そのためにカンパーニアの荒廃ぶりも、さらしものにされた盗賊の死体も目に入らず、盗賊に襲われる危険も全く念頭になかったかといえば、いくらか疑問を感じざるを得ない。

わずか三時間のうちに、大急ぎで駆け回ったフィレンツェの町の印象について、ゲーテは書いている。「この都会を見ると、これを建設した人民の裕福さがうたた惚ばれる。この市は明らかに引きつづき良い治世を享受してきた。」短い滞在にもかかわらず、ゲーテはフィレンツェの町が享受していた長期の政治的安定を見て取っているし、さらにトスカナ大公国の豊かさ、堅実さと清潔さを「法王の国家」の荒廃ぶりと比較する。「それに対して法王の国家は、大地がそれを呑みこんでしまわないからこそ、どうにかその形骸をとどめているという情けない状態である。」小国ながらも、ワイマルの国務大臣ゲーテは、小国分立のイタリアの政情についてよく知っていた。

人口15万のローマを中心にした当時の教皇領、「法王の国家」はヨーロッパで最も貧しく、遅れた国であった。いはば古代の廃墟の上で人々は生活していた。産業は退化し、手工業者もいなければ、自由農民もいなかった。人口の十分の一を占める僧侶たちは、修道院で自給自足の生活をしていた。土地を所有していたのは、教会と少数の大土地所有者たちで、農民は重い税に苦しんでいた。かつての大貴族たちの地所も今は荒れ放題、朽ち果てた古代の廃墟の上では羊が草を食み、円柱列の間を子供達が遊び回り、その傍らで乞食は昼寝をしてい

た。フォロ・ロマーノ、パラティーノの丘、コロッセオは牧草地やごみ捨て場になっていた。人々は貧しかった。貧しさを忘れることができるのは、年に一度の謝肉祭のときだけであった。たとえ進歩的な教皇たちが国内改革を試みても、いつも成功しない。そのためには、法王たちの統治期間は短すぎるのであった。また、有力な枢機卿にとっての関心事は、いつも次の法王選挙だけでしかなかった。当時のローマではこう言われていた。「法王は命令し、枢機卿たちは服従を拒み、民衆は勝手気ままなことをしている。」(Il papa comanda, i cardinali disobbediscono, e il popolo fa quel che gli pare.)³⁾ この教会国家は、すでに腐敗の臭いを発散していたのである。治安のよかろうはずはなかった。

むしろ、ゲーテが大急ぎでローマに向かったもう一つの理由は他ならぬカンパーニアの荒廃、とりわけ劣悪な宿や治安の悪さにあったのではないかと推測することもできよう。「私は二晩も通信を書かなかった。それは宿が悪くて、紙をひろげることすら思いもよらなかったからである。」(十月二十五日夜、ペルージャにて)あるいは、「いま私はあらかじめ準備もせず、案内者もなしにこのイタリアにやってきた乱暴さをつくづく感じている。貨幣がいろいろに異なっていること、馬車屋のこと、物価のこと、宿の悪いこと、これらは毎日頭痛の種で、私のように初めて独り旅をし、しかも絶えざる享楽を求めてきた者には、まったく幻滅の悲哀を感じざるを得ない。」(十月二十六日夜、フォリニョにて)これらは、全体に陽気で弾んだ調子で書かれている『イタリア紀行』のなかでも、めずらしくゲーテが弱音を吐いている数少ない箇所であると言えよう。ゲーテが夜も服を脱がずにベットに横になって、日の出を待ち切れずに宿を後にしたとすれば、それはあるいはシーツも布団もなければ、鍵もかからない寒々とした廃屋のような宿を早々に立ち去ろうとしてのことであったのかもしれない。⁴⁾ 後に、第一次ローマ滞在を終えてナポリに向かったゲーテは、途中のヴェレトリで日記に書き留めている。「これを書いている宿屋ときたら、それはひどい家で、先を書きつづける気力も感興もわいてはこない。」(二月二十二日)ゲーテはやはりここでも翌朝の、あるいは夜中の三時に出発したのであった。⁵⁾

II

ローマに到着後しばらくして、ゲーテは書き留めている。

十一月二十四日。

この国の人民については、彼らが宗教や芸術の華美と尊厳との下にありながら、なおさながら洞窟や森林に住んでいるのと何ら異なるところのない自然人であるという以外、他の言葉を知らない。すべての外国人の眼につくもの、きょうもまた全市の噂に上っている——も

つとも噂に上るだけなのだが——ものはよく起こる殺人事件である。われわれのこの区でも、この三週間に、四人もの人が殺された。今日も今日とて、シュウェンディマンという優れた芸術家がヴィンケルマンと全く同じように襲われた。スイス人の彼は、ヘトリンガーの最後の弟子で、記念牌彫刻師なのである。彼と格闘した殺害者は、彼に二十カ所もの突き傷を負わせ、番兵がやってくると、自殺してしまった。しかし、自殺はこの土地では珍しいことで、人を殺しても寺院に身を寄せれば、それで済むのである。(下線による強調は筆者)

教会国家の民衆についてゲーテは簡潔にただ一言「自然人である」と評し、それ以上、徒に否定的な言辭を費やすことをしていない。永遠の都ローマで、ゲーテの関心はひたすら過去へ、古典古代の美術品や史跡、あるいはルネサンスの巨匠たちの作品に向けられている。「私はローマを、永久のローマを見たいと思うもので、十年ごとに移りゆくローマなどを知ろうとは思わない。」(十二月二十九日) 現実のローマは荒廃していた。そして、ゲーテはあくまでも古典古代への巡礼者であった。

こうしたゲーテの姿勢は、アルプスを越えてローマを訪問する多くのヨーロッパ人に共通していた。一例を挙げると、後のローマ駐在プロイセン大使ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの場合には、それは更に徹底した形で受け継がれている。1804年にローマからゲーテに宛てたフンボルトの書簡の中では、かえってローマの無秩序と荒廃とが、この「永遠の都」に不可欠なものとして称揚されさえしている。「ローマにかくも神聖な無政府状態が、ローマ周辺にかくも崇高な荒地があつてこそ」、古代が過去の亡霊としてさ迷うことができるのであり、もしカンパーニア・ディ・ローマが開拓されたり、ローマが警備のゆきとどいた都市になり、市民がもう短剣を帯びる必要がなくなれば、自分は即刻ここを出て行くと。この書簡はゲーテの『ヴィンケルマンとその世紀』⁶⁾の中で、ヴィンケルマンのローマ体験に関連して引用されたものである。ゲーテもフンボルトと同じ認識を共有していたようである。古代は廢墟にこそ住まうのであると。

周知のように、北方の人ゲーテを夢中にさせたイタリアの都市はローマではなく、自由発瀾として活気に溢れた都市ナポリであり、その明媚な風光であった。両シチリア王国の首都ナポリは、当時ローマより三倍も大きかった。そのナポリを、ゲーテは繰り返し「樂園」と賛美する。「ナポリは樂園だ。人はみな、われを忘れた一種の陶醉状態で暮らしている。私もやはり同様で、ほとんど自分というものが解らない。」「ローマにいと勉強したくなるが、ここではただ楽しく暮らしたくなる。」(三月十六日) ゲーテを夢中にさせた「樂園」の意味するところは、ローマの惨憺たる有り様と比較して、はじめて理解されるのであろう。ナポリからみれば、「テヴェレ河の低地にある世界の首府は、僻地の古寺のようで」あつたのであるから。けれども、「僻地の古寺」にしては血腥い事件がよく起きる。ローマは過去の亡霊

と、生きた盗賊の同居する都であった。

身近で起こったスイス人彫刻家の殺害事件は、ゲーテにヴィンケルマンの不幸な死を思い出させる。ヴァチカンの法王庁の古美術品監督であったこのプロイセン人が、当時はオーストリア領であったアドリア海に臨む港町トリエストで不慮の死を遂げたのは、十数年前のことである。しかしゲーテはいま、その事件をまざまざと想起している。1768年6月、トリエストにてヴィンケルマン殺害される。それは、当時ライプツィヒ遊学中のまだ十代の青年ゲーテにとって、「晴天の霹靂のごとく」衝撃的な事件であった。古典主義者ヴィンケルマンの名はドイツだけでなく、ヨーロッパ中に知られていた。古代芸術の理想美を説くヴィンケルマンの文章は、従来のドイツの学者たちのひたすら威厳の鎧に身を固めただけのペダググチックな文体とは全く異なっていた。彼の『絵画と彫刻におけるギリシアの作品の模倣について』（以下『ギリシア芸術模倣論』と呼ぶ）、『古代美術史』等の著作は、バロックとロココの世界を覆すことになる革命の書であり、この美術史家こそルソーに次ぐヨーロッパ文明の第二の革命家であると評価する学者もいる。『古代美術史』の著者は古代ギリシアで芸術が開いた原因のひとつとして政治的自由と民主政体を強調していたのである。とりわけ良質の文学がまだ未成熟であったドイツにおいては、詩人のようにみずみずしいヴィンケルマンの新鮮な筆致は、若い世代の読者をひときわ感激させ、酔わせていた。

日に増し世界に瀰漫して行く良き趣味は、もとギリシアの蒼空の下に形を成し始めたものである。他民族の創意になるものは凡て謂はばただ最初の胚種としてギリシアの地に来りここで全く別の性質と形体とを取った。そのギリシアは四季温和な気候の故に必ず聡明な人間を生み出すに違いないというので、ミネルヴァが他の土地を措いて之をギリシア人の住地と定めたと言い伝えられる国である。(中略)

芸術の至醇なる源泉は開かれた。それを見出し、それを味わう者は幸である。この源泉を探ねるとは、アテネに旅することである。そして今ドレスデンは美術家にとってアテネとなった。

我々にとって偉大になる、いや出来れば他の模倣を許さぬ者となる唯一の道は古代人の模倣にある。⁷⁾

『ギリシア芸術模倣論』冒頭の有名な逆説を含む箇所からの引用である。干からびて硬直した世界からの脱出口を求めていたゲーテやヘルダーの世代にとって彼の著作は、いはば新しい時代の到来を告げる福音であった。疾風怒濤派と呼ばれるこの世代の少なからぬ者が、プロイセンの田舎町の狭苦しく貧しい境遇から、広々とした世界へと羽ばたいていったヴィンケルマンその人の中に憧れの人物を見ていたのであろう。ただ、彼の初期の著作は簡潔さ

ゆえの謎めいた箇所を含んでいた。しばしば引用や典拠を示すことを忘れていた。豊富な古典文献学的知識があり、かつ当時のドレスデンの美術界の内情に通じていれば、そうした部分の含意も解釈できたであろう。その謎を解こうと、熱心に『模倣論』を繙いたゲーテの言葉を引用すれば、それは「神託めいた書物」（『詩と真実』第二部）であった。

学生ゲーテが大学の講義に出席しないで、絵の勉強に熱心であったことはよく知られている。絵の先生は、美術学校長アダム・エーザーであった。エーザーはプレスブルク（現ブラチスラヴァ）生まれのオーストリア人、ヴィンケルマンはプロイセン人と出身地は異なるが、二人は同年の生まれである。その親しい交友は、二人がまだドレスデンにいたころにさかのぼる。イタリア留学の前年、1754年ヴィンケルマンはエーザー一家に間借りしながら、ザクセン王国の王立美術館で勉強していた。古典文献学から古代の造形美術の歴史的研究への途上にあつたヴィンケルマンに、エーザーは大きな影響を与えた。イタリア派の画家であつたエーザーから直接に素描の指導を受けたこともある。エーザーは、ヴィンケルマンの処女作『模倣論』のために挿絵の銅版画を描いただけでなく、その内容にも大きく貢献していると言われている。彼もまた、当時の流行の装飾であつたロココの唐草文様と貝殻文様を嫌悪し、ギリシア芸術の規範性を主張していた。エーザーを含めて、ヴィンケルマンはローマからドイツの友人たちに、夥しい量の手紙を書き続けていた。

ゲーテがヴィンケルマン死去の報に接したときの様子は『詩と真実』のなかに、かなり詳しく書かれている。ちょうどそのとき、エーザーの生徒たちは、ヴィンケルマンがイタリアから初めて帰国して、芸術の保護者で友人のデッサウ侯を訪問するさいに、師エーザーとともに彼の姿を一目見ようと待ち構えていた。そこに思いもかけぬ訃報である。若いゲーテの驚愕のほどが推察されよう。ゲーテは、「この異常な事件は異常な影響を及ぼし、世人はこぞって嘆き悲しんだ」⁸⁾と書いている。レッシングはフリードリヒ・ニコライに宛てた手紙の中で、自分の人生から数年を死者に進呈したいと書いた。遠くバルト海に臨む港町リガでは、ヘルダーが溢れ出る哀悼の感情を長詩『同胞ヨハン・ヴィンケルマンに寄せる頌詩』で歌つた。

どこへ、どこへ、
引きさらって行くのか
美の息子を
鬼女の髪からのぞいた赤く燃える眼と
血にまみれたつめの殺人者よ
神に祝福された者たち！
オリュンポスの女神たちよ！ 姿を見せよ！

救いたまえ、救いたまえ
あなたたちを賛美した友を
(後略)⁹⁾

あたかも、リーダーを失った野獣の群れから響いてくる慟哭のようである。「美の息子」がこの世代に及ぼしていた影響、そしてその喪失の大きさが窺われよう。ヘルダーはさらに、ヴィンケルマン死後十周年を記念してカッセル科学アカデミーが懸賞論文を募ったさいに、『ヴィンケルマンの記念碑』を書いて応募した。

ゲーテも書いているように、この美術史家の悲劇的な最期は、その生涯と仕事にたいする人々の関心をいやがうえにも高めた。ゲーテもその例外ではない。むしろ、それは若いゲーテ自身に最も当てはまるようである。ウェルテルの世代が畏敬の念をいだいてその名を呼んだ人物との、胸をわくわくさせて期待していた出会いが「晴天の霹靂」によって実現しなかったのであるから。失われた遠い古代の国を再発見し、永い眠りから目覚めさせたヴィンケルマンをゲーテは「第二のコロンブス」と呼んだ。このドイツ古典主義の先駆者と青年ゲーテとの出会いは実現しなかった。しかし、ヴィンケルマンの名前はゲーテの記憶から消えて行くことはない。むしろこのとき以後彼の記憶はゲーテとともに成長し続ける。「すぐれた人物の追憶は、すぐれた芸術品を目の前にするのと同じように、折にふれてわれわれの考察心をかきたてる。どちらもあらゆる時代への遺産であって、前者は功業と死後の名声として、後者は言葉にあらわしがたいものとして現実に残っている。そういう格別な存在については、ただその全体をよく見ることだけが真の価値をもっているということは、心ある人なら誰でもよく知っている。」これは後にゲーテが、みずからヴィンケルマンの書簡集を編んだときに書いた評論『ヴィンケルマンとその世紀』の序言の書き出しである。50歳にしてトリエストで客死した先駆者の生涯とその業績を追想し、その全体像をもういちど明らかにしようとするのがゲーテの意図である。1804年、ゲーテはこのとき55歳である。この評論はまた題名が示すように、新しい世紀の入り口に立って、過ぎ去った世紀のプロフィールをヴィンケルマンという極めて18世紀的な人物を通して描き出している。

III

イタリア旅行中のゲーテが死せるヴィンケルマンと出会うのはローマにおいてである。フンボルトの言うように、ここは過去の亡霊がさ迷うことのできる「永遠の都」である。ヴィンケルマンはローマからあるザクセンの友人に宛てて書いた。「ローマはすべての世界に対する最高学府であり、私もここで浄化され試練を受けた。」この一節を引用してゲーテもまた

書き留める。「人はいはば生まれ変わらねばならぬ」と。ローマは二人にとって共通の「第二の誕生」の地となる。ローマに到着するとさっそくゲーテは『古代美術史』新版のイタリア語訳を買い入れて、その有益さを日々確認することになった。当時『美術史』で展開された見解のいくつかは、その後の研究成果や新発見によって反証されていたであろう。しかしそれはまだまだ「有益な書物」であることには変わりなかった。翌月にはヴィンケルマンの書簡集を入手する。

今朝ヴィンケルマンが會てイタリアから書き送った書簡集が、私の手にはいった。私は何という感動をもってそれを読み始めたことか。三十一年前のちょうど今と同じ季節に、私よりももっと哀れな痴者として、彼はここへやって来た。彼にとって古代の遺物や美術に関する徹底的なしかも堅実な研究をすることは、実に真剣な仕事であった。そして、かれはいかに立派にその研究を仕とげたことであろう。この地にあつて自分の手にはいったこの人の記念は、私にとって実に至極のものである。(下線による強調は筆者)

ゲーテはヴィンケルマンの著作を読みながらローマの史跡巡りしている。古代のローマを案内するのは、死せるヴィンケルマンである。この法王庁の古代美術監督はギリシア・ラテンの古典語に精通していたことは言うまでもなく、近代の民族語も自在に操るポリグロットであった。彼はドイツ語とフランス語とイタリア語で本を著した。その語学の才能を見込まれ、北方の国から教養の旅に出た若い貴族など、ローマを訪れる各国の貴顕紳士を法王に代わって案内したローマ第一のチチェローネでもある。

たとえば、ヴィンケルマンによって古代美術の最高傑作とされたベルヴェデーレのアポロンの像。法王庁の八角形の中庭ベルヴェデーレで、彼は何度このデロス島出土の大理石像の前に立ったことであろう。ゲーテがこのアポロンの像を目にしたとき、おそらくはヴィンケルマンの捧げた賛歌が聞こえていたはずである。

このアポロンはすべてのアポロン像に優っている。ホメーロスのアポロンが後代の詩人の描くそれを凌駕しているように。彼の容姿は人間を超越している。そしてその立った姿は彼を満たす偉大さを証している。永遠の春が、幸多き不死の園エリュシオンにあるがごとく、成熟した魅力ある男性的肉体を好ましい若々しきで包み、誇らしげに発達した四肢の上を優しく愛撫する。お前の精神を肉体ならぬ美の国へ行かしめ、そして自然を超越した美で精神を満たすために、神々しい人体の創造者たるよう試みよ。ここでは死すべき定めや人間的貧相は求められてはいないのだから。この肉体を暖め、動かしているのは血管でも腱でもない。緩やかな流れが注ぎ込んだように、この世ならぬ精霊が全身をくまなく満たして

いる。彼はまず大蛇ピュトンを弓を使って追いかけ、そして力強い足取りで大蛇に追い付くと、止どめを刺した。得意の絶頂にあっても彼の高邁なまなざしは、勝利の遙か彼方を見つめているようだ。（中略）

品のよいぶどうの枝がしなやかに流れるように巻いた彼の柔らかな髪は、微風になびいて神々しい顔の周りで揺れる。聖なる香油が塗られ、美神グラティアが頭頂で優美に編んだようにみえる。この傑作を目にすると私はほかのすべてを忘れる。私は自分がデロスへ、アポロンの座の栄誉を与えられたリュシスの聖域へと拉し去られるのを感じる。というのもわが像はピュグマリオンの美少女のごとく生き生きと動き出すのだから。これをどう描き、また説明できるであろうか。

（後略）¹⁰⁾

（『古代美術史』第二部）

一読して明らかなように、ヴィンケルマンはここで詩人の言葉を語っている。美術作品を様式史のなかに位置付け、その作品の価値を学問的見地から評価したり、あるいは従来の見解を批判的に検討するというような冷静な学者の言葉ではない。往古のギリシア人がこのアポロン像に託した美の理念、プラトンの美のアイデアを読み解こうとみずからの美的体験を言語で表現する。こうして対象としての作品と観察者の間にあるはずの距離がなくなり、大理石像の美は生きた体験となる。アポロンは「ピュグマリオンの美少女」のごとく動きはじめる。ヴィンケルマンにとってこれこそ神の、そして永遠の青春の顕現であった。

ヴィンケルマンの熱狂的な文章はライプツィヒの大学生ゲーテには抗い難い魅惑を及ぼしていたであろう。けれども37歳のゲーテはもうかつての若いゲーテではない。「ウェルテル」の作家としての成功もいまはむしろ重荷でしかない。若い時期の熱狂の醒めたゲーテは、ローマ第一のチチェローネであったヴィンケルマンの解説ならぬ荘重な賛歌をどのように聞いたであろうか。ゲーテはこのアポロン像についてはただ、石膏の模造だと「生き生きとして、青年らしく自由な、永遠に若い存在のもつこのうえなく気高い息吹が」消え失せてしまう、と記しているのみである。

古代美術の聖地ローマにあってゲーテに深い感銘を与えているのは『古代美術史』よりも、それを著した著者の書簡集である。ヴィンケルマンがローマにやって来たのはゲーテと同じ37歳のときである。苦節の時期が長かった。プロイセンでの貧しい教員生活とザクセンのピューナウ伯の私設図書館司書の時代を経て、ドレーズデンの宮廷から奨学金を得てようやく憧れの地を踏みしめたとき彼はもう若いとは言えなかった。『模倣論』は旅立つ少し前出版されたばかりであった。けれどもゲーテは彼の書簡集のなかに少年のようにういういしい精神を発見して感動する。もちろんヴィンケルマンは、古典文献学および古代美術史に関し

ては驚嘆すべき学識を有していた。そしてその学識ゆえにドレーズデン宮廷の教皇大使らに見込まれて、イタリア留学の機会を得たほどであった。しかしその生涯は「18世紀の最も美しい教養小説」¹¹⁾とも評されるほど、教養小説的であった。

この時代を代表する文人がしばしば貧しい境遇の出であるように、彼もまた貧しい靴職人の家に生まれた。大学へ進学したときは学資がなくとも学べる神学部に籍を置いた。卒業すると富裕な家の家庭教師、薄給の教員、貴族の私設図書館司書と、いつも物質的な安定とは無縁であった。前半生の彼は貧窮と結婚していた。教養小説の主人公さながら、彼は社会の最底辺から自己形成と社会的階層の階梯を昇り続ける。先駆者ヴィンケルマンのイタリア旅行を書簡によって追想しつつ、ゲーテが記した「哀れな痴者」の一言がそのことを語っている。古代美術史の碩学ヴィンケルマンに会う機会を逃したゲーテはいま書簡集のなかで「哀れな痴者」と出会っている。同じ年齢で、同じ季節に、同じ異国の地にあるという運命的な符合の下で。

ゲーテを感動させた手紙を一通、長くなるのを恐れず以下に訳出してみたい。

1755年12月7日、ローマ。

元気で楽しく過ごしていることと思います。ぼくは8週間旅行して、11月18日につつがなくローマに到着しました。旅行でいちばんよかったのはチロルと、アウグスブルクを出てから通過するバイエルンの一帯です。雪を戴く山々に囲まれた盆地の真ん中のある村では、イタリアにいるよりもぼくは喜々としていました。もしぼくがこの地方を眺めたときの眼でもって見るのであれば、素晴らしさも、驚きもないでしょう。一本の道が部屋の中を通るようにすごく高い山を越えています。チロルの農夫は鉄のハンマーを手にして切石を砕いて砂利にしています。驚くほどきれいな山の麓には、村がなくても半時間ごとに大きな宿屋があり、とても清潔で贅沢です。ベットはいくらでもあって、どこでも銀のナイフとフォークが出てきます。二十人程で食事をしましたが、各自がそのようなものを持参していました。トリエントに入れば、すぐにもう貧しさと不潔さが目につくのですが。どこでも美人が目につきます。ポーツェン（ボルサーノ）ではぼくの見た娘さんはみんなかわいいというか、すごく美人でした。トリエントとヴェネチア地方の最初の山道は最悪で、2ドイツマイル進むのに丸一日費やしました。

ヴェネチアは最初の何日かは人を驚かせる町です。でもその驚嘆はすぐに跡形もなくなります。美しい家並みはたいい運河沿いにあり、これを見るには gondola に乗る必要があります。仲通りは狭くて二、三人がやっと並んで歩けるくらいです。建物は高いのですが劣悪です。ヴェネチアはあまりに寒くて、予定より早く発ちました。サンマルコの図書館は見

ませんでした。ザネッティは田舎風でした。教会の多くはローマのより見事です。ローマではヴェネチアのような大理石のファサードのある教会は皆無です。それにローマの教会は絵画も豊富ではありません。ぼくが泊まったのはバイロイト辺境伯も宿泊したことのあるいちばん大きなホテル「フランスの盾亭」です。主人はドイツ人です。ポローニャからは不承不承早めに発ちました。ピアンコーニ邸にいたのは五日間です。都合のよい便を利用せざるを得なかったのです。ポローニャまではまだすべてが緑でした。オレンジはまだ庭園にあって、花が咲いているのもあります。サンサルバドーレの図書館、ここには貴重な古い草稿、1200年くらい前のCodex Lactantiiなどが所蔵されています。もうひとつのはフランチェスコ修道会で精選して印刷された書籍を所蔵しています。ポローニャからはアンコナとロレットを経由しました。この旅の11日間は楽しく過ごしました。ただ残念だったのは道づれのポローニャの人はお国言葉しか話さず、ぼくは全然理解できませんでした。この旅の間は眠っているほうが多いくらいでした。このあたりを旅する者は吐き気を抑えなくてはなりません。最後の数日はたいてい5台のセディアで走ったので、夕食のテーブルにつくのは14人くらいでした。連れの中にはヴァイオリンの上手なボヘミアのカルメル会修道士がいて、いいワインがあるとダンスを踊りました。カンパーニア・ディ・ローマに近付くにつれて、体に良くない空気の徴候が現れました。連れの二人は夜中に口が膨れあがり、痛むので午前中は顔に包帯を巻いていました。ローマから30マイルあまり（これはイタリアマイルで、5ないし6マイルが1ドイツマイルに相当するでしょう。）総督フラミニア街道が始まると、侘しい景色がはじまります。本物の荒地で樹木一本見られません。ところどころ畑でブドウの枝が勝手に蔓を出しています。でも住民はいません。これがローマのブドウ畑まで続きます。ローマの税関では何冊もの本を押収されました。数日後に本は戻りましたが、ヴォルテール著作集はまだ返してもらっていません。危険はありません。ただローマ市総督には借りを作りたくありません。

ぼくの幸運の女神はメンクス氏宛の手紙です。彼はじつに信頼できる友人で私の世話をやいてくれています。彼の家はぼくの避難所で、どこよりも満足しています。いまはまだ自由ですが、今後もそうするつもりです。ぼくはまだ以前のままの身なりで外出し、いっばしの芸術家として暮らしています。その代わり若い芸術家が勉強するのを許される場所は素通りします。カンピドリオの丘は別です。ここには古代美術、彫像、石棺、胸像、碑文等のローマの宝物があり、朝から晩までいるのも全く自由です。ロクロールを着て気軽に外出しています。ここではこのマントが流行っています。もっぱらドイツ人やフランス人の芸術家と食事をしますが、ドイツ料理がないのは物足りません。朝と午後にはコーヒーハウスに行きます。一杯飲んでザクセンのお金で6ペニヒです。まだ暖房はなくともだいじょうぶです。ぼくの窓は日中はたいてい開いています。でもぼくはたっぷり眠るわけではなく、早起きな

ので、暖炉に火を入れて紅茶を飲みます。

ここに来て二週間たえずローマ市内を歩いています、まだ半分も見せていません。特に図書館は全然見ていません。冬は雨の天気ばかりで、人々は大きな傘を持って外出します。好天でもこのばかでかいのを小脇にかかえています。

ぼくたちは自分で見ることなく、半ば本で見て古代美術について語っているのだということを知りました。自分の犯したいくつかの誤りもわかりました。ぼくのふたつの論文について公平な意見が聞けることを期待しています。それらは公刊されているはずですが。法王を見ました。あやうく肝心なことを忘れるところでした。

恐惶頓首

永遠の友ヴィンケルマン¹²⁾

この手紙を受け取るのは図書館司書時代の同僚フランケである。この旧友をはじめとしてヴィンケルマンはローマから夥しい数の手紙をかつての学友たち、出版者、美術愛好家、学者などに書き送った。彼の手紙の中にはあらゆることが書かかれている。考古学上の発見についての研究成果や仕事の計画についてだけではない。自分がどのような場所に入出し、誰と交際しているか、どんな服装をし、どのようなものを飲食しているか、自分がどれほどローマで自由を得ているか、そしていまや高位聖職者たちから信頼され、どれほど気がねなく交際しているか、高尚なことから卑俗なことまで、およそ何かを書かずにおくということがなかった。アルバーニ枢機卿の同居人となった彼はクイリナーレの丘にある邸宅の自室からローマを見下ろしながらペンを手にして、ほとぼしる心情を手紙にしたためた。彼には故郷の町シュテングールから永遠の都ローマに到る自分自身の遍歴が夢物語のように思われたであろう。

家族のいないヴィンケルマンにとって友人たちは自分の成功を共に喜んでくれる代理家族であった。手紙の受け取り人に女性はいなかった。ローマ時代の後半は若い芸術家、教養を身につけようとローマにやって来る若い貴族、こうした青年の教育にとりわけ熱心だった。彼の性格を特徴づけている純真素朴さ、そして明らかな同性愛の傾向をゲーテは古代的な資性と呼び、彼の中に近代のギリシア人を見ている。

IV

1804年ゲーテは『ヴィンケルマンとその世紀』のなかでヴィンケルマンの生涯を素描した。この評論と書簡集がこの時期に出版された背景としては、しだいに優勢になるロマン主義の傾向に対して古典主義を擁護するためであったとされる。この評論に対する批判的見方は先

に名を挙げたフリーデンタールに代表されるであろう。ゲーテが描いたヴィンケルマンの肖像は多くの点でゲーテ自身の自画像であり、かつまたヴィンケルマンこそ近代のギリシア人であると、故意に神格化されている。そして殺害されたヴィンケルマンの悲惨な最期を無視し、隠蔽していると。¹³⁾

同じ内容の批判をハンス・マイヤーは『ヴィンケルマンの死と二重生活の露呈』において繰り返している。古典主義の後ろ盾としてヴィンケルマンを担ぎ出すためにゲーテは、彼が幸福で調和のとれた学者であり芸術愛好家であった、という自分のテーゼに矛盾することをいっさい触れないようにしていると。マイヤーが批判しているのは特に評論の最後「死去(Hingang)」の記述である。その第一の点は、ゲーテがトリエストの凶行をむりやりにつじつまを合わせて解釈しているというもので、第二の点はヴィンケルマンの同性愛的傾向を無視して、男らしさを意図的に強調しているところにある。¹⁴⁾問題にされているのは次のような記述である。

こうして彼は、およそ望みうる幸福の絶頂において、この世を去った。… 彼が人間存在の頂点からただちに天国にのぼり、束の間の恐怖、短時間の苦痛が彼を生者の世界から奪い去ったということは、むしろ彼の幸福として喜ぶべきであろう。老いの衰え、精神力の減退というものを彼は感じなかった。… 彼は壮者として生き、完全な壮者としてこの世を去ったのである。いまや彼は、後世の人々の追憶のなかで、永遠にたくましく強壮な人物として映じるという特典を享受している。なぜなら人間とは、地上を去ったときの姿で冥界を彷徨するものであり、アキレウスにしても、永遠に奮闘する若者として私たちの記憶にとどまるからである。

ゲーテの解釈を批判するために、マイヤーはこの殺人事件の裁判資料から具体的証拠、「束の間の恐怖、短時間の苦痛」ではなく四箇所、刺し傷から長時間にわたって失血したこと、殺人者アルカンジェリとの激しい格闘があったことなどを引いている。この事件に関してはかなり詳細な裁判記録が残されているし、またヴィンケルマンの最後の旅に途中まで同行していたイタリア人彫刻家バルトロメオ・カヴァチェッピの報告も知られていた。こうした資料が伝えるヴィンケルマンの最期はたしかにゲーテの記述と矛盾しているようにみえる。ゲーテは執筆に際してこうした資料に目を通してはいるはずである。そしてまたイタリア滞在中にはヴィンケルマンの友人にも直接会っている。ゲーテは誰よりもよく知っていたはずである。ゲーテの解釈を議論するためには、フリーデンタールもマイヤーも何故か言及していないが、カヴァチェッピの報告したヴィンケルマンの精神状態の異変を問題としなくてはならないだろう。

その報告によればドイツへの旅の途上でヴィンケルマンは再三ひどい憂鬱症あるいは虚脱症状に苦しんでいる。彼が旅を中断したのはレーゲンスブルクであったが、そのまゝにミュンヘンに着いたときにカヴァチェッピは同行者の精神に異変を感じていた。旅行を続ける気力を失ったヴィンケルマンは何を聞かれても、「Torniamo a Roma(ローマへ帰ろう)“と単調に何度も何度も力なく繰り返すばかりであった。異常の徴候はすでにチロルでも現れていた。13年前には彼を感激させたチロルの自然の雄大さも、美しい村も今は信じ難い嫌悪感(una aversione incredibile)を催させる。彼はだしぬけに言う。「なんてひどい、ぞっとする地方なんだ。なんと途方もなくそそり立つ山々なんだ。」あるいはまた、「何て悪趣味な建て方だ。ほら、あのとんがった屋根。」同行していたカヴァチェッピは子供に説明するように言わねばならなかった。「アルプスの家には傾いた屋根が必要なのだ、でないと積もった雪の重みでつぶれてしまうからね。」ミュンヘンからレーゲンスブルクまでは同行者がヴィンケルマンを引きずっていったのであった。ウィーンではマリア・テレジアに謁見したが、カヴァチェッピはローマに帰るヴィンケルマンと別れてベルリンをめざして旅行を続けたという。

その後、「青白く、震えて取り乱し、死人のように虚ろな眼をした」ヴィンケルマンは数日ウィーンの病院に入院してから、ライバッハを経由してトリエストに向かった。トリエストではサン・ピエトロ広場に面した旅館ロカンダ・グランデに投宿して、ヴェネチアあるいはアンコーナ行きの船の便を待った。宿では匿名を希望してジョヴァンニ様と呼ばせていた。隣室の滞在客がフランチェスコ・アルカンジェリであった。ヴィンケルマンはこの窃盗の前科者にウィーンの女帝から拝領した金貨を見せ、彼の想像力を刺激してしまった。6月8日の午前10時頃事件は起きた。自分の受けた傷が致命的なものであることを知って彼は本名を明かし、午後4時頃死亡した。

数日後アルカンジェリは逮捕された。裁判はただちに開始され、約一月後に死刑の判決が言い渡された。死刑が執行されたのは7月20日で、犯行のあったのと同じ時刻の午前10時、場所も同じく旅館の向いのサン・ピエトロ広場であった。車裂きの刑であった。遺骸は市門の前にさらされた。¹⁵⁾

『ヴィンケルマン — アポローンに捧げた生涯』の著者レップマンが言うように、運命が彼を襲ったのはトリエストではなかった。「アルカンジェリのナイフはただヘルダーリンやニーチェのような長い死の苦悶を省いたにすぎないのかもしれない。」仮にトリエストの凶行がなかったなら、ヴィンケルマンもまた精神の闇の中で長く苦しみ続けたであろう。ゲーテが「束の間の恐怖、短時間の苦痛」と言ったのは、レップマンの言う意味で理解してもよいのではないだろうか。

注

- 1) R. フリーデンタール 『ゲーテ — その生涯と時代 —』 (上) 平野・小松原・森・三木 訳 講談社 昭和54 350頁
- 2) 『イタリア紀行』からの引用にさいしては、次の二種の翻訳を適宜利用した。ゲーテ 『イタリア紀行』 (上 中 下) 相良守峯 訳 岩波文庫 1993 『ゲーテ全集』 第11巻 高木久雄 訳 潮出版社 1979
- 3) Wolfgang Leppmann: Winckelmann, Ein Leben für Apoll. Scherz Verlag, 1982. S.129
このレップマンによるヴィンケルマンの伝記からは多くの教示を得たが、煩瑣になるのを避けいちいち記さなかった。
- 4) 塩野七生のエッセイ「永遠の都」もまたローマへと急ぐゲーテを紹介している。それによれば、ゲーテはローマへと急ぐあまり万聖節の何日か前に北の城門ポルタ・デル・ポーポロに着いてしまった。しかし万聖節の日にローマに入城するために、ゲーテは城門前の宿で十一月一日を待った。エッセイの著者は、このように情熱的で純情な「田舎者」にこそ「不滅の娼婦」たるローマはそのあやしい魅力を十分に味わわせるのだ、と書いている。
(『イタリアへの手紙』 塩野七生 新潮社 1972 30-35頁)
- 5) ローマへの旅行者を悩ました宿屋のベットについての証言をもうひとつ引用する。出典はヴィンケルマンが1755年12月20日にローマから友人ベーレンディスに書いた手紙。
「この旅行中多くの宿屋で悲惨な目に遭いましたが、ローマに近づくほどひどくなります。ベットは朝に肩甲骨が痛くなります。」
Johann Joachim Winckelmann, Briefe, Berlin 1952-56, Bd. I, S.193
- 6) 『ヴィンケルマンとその世紀』からの引用はつぎの翻訳によるが、部分的に変更を加えた。
『ゲーテ全集』 第13巻 芦津丈夫 訳 潮出版社 1980
- 7) 『希臘藝術模倣論』 澤柳大五郎 訳 座右實刊行會 昭和18 7 - 8頁
- 8) 『ゲーテ全集』 第9巻 山崎・河原 訳 潮出版社 1979 292頁
- 9) Winckelmann, Briefe, Bd. IV, S.357
- 10) Winckelmann, Geschichte der Kunst des Altertums, Phaidon Verlag, 1934. S.364f.
- 11) アンジェロス・ノジャック 『ドイツ古典主義』 野中・池部 共訳 白水社 1980 39頁
- 12) Winckelmann, Briefe, Bd. I, S.189-191

- 13) フリーデントール、上掲書（下） 50-51頁
- 14) Hans Mayer, Außenseiter, Suhrkamp, 1981 S. 198-206
- 15) レップマンの上掲書および書簡集第4巻所載の„Briefe und amtliche Berichte zu Winckelmanns letzten Lebenswochen und zu seinem Tod: Nr. 136-205a“, さらにヴィンケルマン全集第1巻所載の„Biographie“を参照。
Winckelmann, Sämtliche Werke 13Bde, Bd.1, Zeller, 1965

(北海道工業大学助教授)